『週刊ポスト』2017.10.16(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第9回 同世代に人気だった和泉雅子とエレキの魅力を伝えた山内賢

昭和40年代の初め、日活の青春スターだった吉永小百合と人気を二分していた女優は、和泉雅子でした（松原智恵子もいましたが）。当時、中学生だった私自身の体験からいえば、しっかり者のイメージが強かった小百合姉さんより、学年では吉永より3年下で年齢的にも近くてやんちゃ風な和泉マコちゃんのほうが、仲間内では人気がありました。

マコちゃんファンにとって決定的だったことは、山内賢とのデュエットで大ヒットを記録した『二人の銀座』の登場でしょう。

山内賢は子役時代から、実兄の久保明（久保浩でも久米明でもなく、ホラー映画の傑作『マタンゴ』の主役を張った人です）とともに東宝に所属していましたが、昭和37年に日活に移籍します。

歌が上手でギターも得意だった山内は、そこで和田浩二ら日活の俳優仲間と「ヤング・アンド・フレッシュ」という名前のエレキバンドを結成します。形容詞を2つ重ねたネーミングも時代を感じさせますが、訳のわからないバンド名ばかり横行する今となってみれば、むしろ新鮮な印象を受けますね。

当時は「ヤング」も「フレッシュ」もまさに若々しさと新しさを象徴する外来語でした。私のお気に入りだったラジオ番組は『フレッシュイン東芝ヤングヤングヤング』でしたし、高校時代に見入ったテレビ番組は『ヤング720』や『若さで歌おうヤアヤアヤング！』でした。

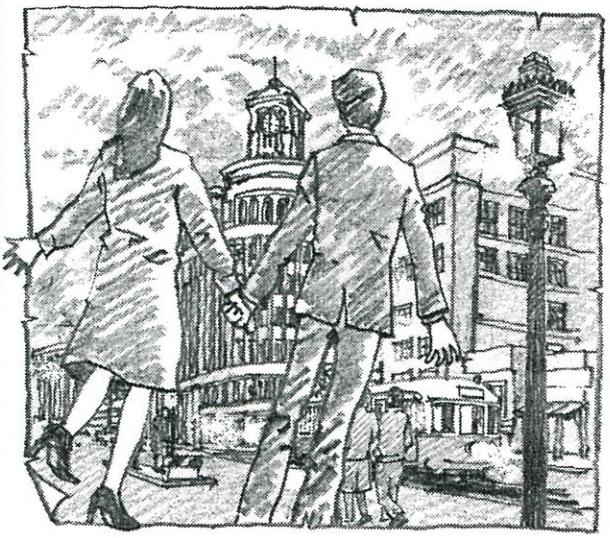
日本におけるベンチャーズの最初のアルバム『カラフル・ベンチャーズ』が発売されたのは昭和37年4月ですが、まだ村田英雄の『王将』が商店街のマーケットのラジオから流れ続けているという時代でした。

ベンチャーズが日本でブレイクするまで2年半ほど待たなければいけない時期だったのですから、山内の先見性は加山雄三や寺内タケシと同等に評価されてもいいのではないか、と私は思っています。

スター性や歌の創作力では加山に及ばなかった山内ですが、青春歌謡映画に数多く主演、舟木一夫や西郷輝彦、三田明、そしてGS時代にはスパイダースとの共演で彼らの人気の後ろ盾になったことも忘れてはいけないでしょう。

昭和41年2月、レコード会社をテイチクから東芝に移した山内は『ユー・アンド・ミー』（詞・高崎一郎、曲・鈴木邦彦）という和製ポップスで、初めて和泉雅子とデュエットすることになります。すでに時代は、村田英雄からベンチャーズに移行し、エレキサウンドが日本列島を席巻中でした。

そして同年秋、山内&和泉コンビによるデュエット第2弾として、ベンチャーズ作曲の『二人の銀座』が発売、51年前の昔になりますが、その山内賢も今は亡く、去る9月24日は、彼の七回忌に当たる命日でした。



ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和大衆歌謡考」』第1～3集（グスコー出版）がある